

## 12.津波の語り部から学ぶ

大震災の被害や犠牲を後世に伝えたという被災地での語り部の方々の話は、涙を伴う言い知れぬ思いを感じます。このような伝達方法は、大昔から人々の間で行われ、それが地域の災害文化や伝承となり、伝えられてきたし、生活の礎になってきたものと思います。自然災害は、頻繁に起きるものではありませんが、起きれば想像を絶するものになるわけで、その長いスパンを継続して伝えていくということは大変なことです。それを支えるのがコミュニティということになるわけで、自然災害はいつか必ず来るものであるという共通の認識が、同時に互助を主にした日常の安全、安心な環境を支えているということです。

したがって、語り部自身には、状況報告だけでなく被災前と未来への伝言が期待されていて、我々いま生きているものが、未来へなにを託すべきなのかを考えるためのヒントを得ようとしているのではないのでしょうか。

つまり、経験を生かすということは、経験知と専門知が一体となったメッセージになるよう・しようとする気がしています。この自然災害の誘因である自然現象は畏怖と同時に恵みでもあり、これがなければ人類の存在はないし、自然に学び共生していかなければならないということを改めて考えなければなりません。それにしても過度の自然への対抗は避けなければなりません。自然には潜在化した、我々に望ましくないものがありますが、それが顕在化したり、その変化を促進するようなことは災害を呼び起こすことにもなります。そのためには、われわれは、地理というものを学ぶ必要があります。地理は、過去や結果だけを学ぶものではなく、未来を志向するものです。防災も多方向から考えられる、考えなければならぬ極めて、日常的というか生活に密着したアプローチが求められる学際的な領域です。まさに、経験をどう生かすかということになります。

以下に、仙台の沿岸部での津波被害地域を例に、何が語られなければならないのか、聞き手が何を期待されているのかを述べます。

まず、津波被害や犠牲になられた方々の結果だけ、単なる記念スポットだけでなく、それに至った地域環境などにも触れてほしいものと思います。そして、大方の人が関心を持つのは、なぜこんな大規模な津波が発生し、犠牲者が出たのか、岩手県沿岸部のリアス式海岸と宮城野平野のような沖積平野におけるメカニズムがどう違うのかだと思います。そして、これまで、どのような自然災害がはっせいしていたのかも知りたいと思われまます。

それから、ハード対策による震災風化の促進、新たな災害文化の構築を阻害していないか、何を積みあげていけばよいのか、次世代へ何を継承するのか、できるのかを考えるためのヒントが求められているような気がします。

また、沖積平野は、津波だけではない自然災害のリスクが高いわけで、地形・地質をベースにしたリスクマネジメントの必要性を再認識する機会にしたいと思っています。